

2016年6月5日川越教会

神の都の門で

加藤 享

【聖書】ヨハネの黙示録21章22～27節

わたしは、都の中に神殿を見なかった。全能者である神、主と小羊とが都の神殿だからである。この都には、それを照らす太陽も月も必要でない。神の栄光が都を照らしており、小羊が都の明かりだからである。諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。都の門は、一日中決して閉ざされない。そこには夜がないからである。人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者はだれ一人、決して都に入れない。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れる。

【序】戦争に次ぐ戦争

去る5月27日に**広島**で、G7会議を終えた**オバマ米大統領**と**安倍首相**が、1945年8月6日一発の原爆投下で亡くなった10万人を超える日本人と4千人を超える朝鮮人と米軍捕虜死没者の慰霊碑に花輪を捧げて黙祷し、スピーチをしました。一方ヨーロッパに帰国した**オランド仏大統領**と**メルケル独首相**は5月29日に、第一次世界大戦中、フランス東部の**ベルダン**の激戦で毒ガス兵器等の使用によって70万人以上が死傷した悲劇の**100年記念式典**に揃って出席しました。

20世紀は、**戦争に次ぐ戦争**の100年でした。日露戦争に始まり第一次、第二次世界大戦、ドイツのロシア侵攻、日本の中国、アジア侵略。原爆2発で日本が降伏した後でも、世界各地では**民族紛争**の悲劇が止むことはありませんでした。日本の隣りでは**朝鮮戦争**が起きました。**旧ユーゴスラビヤ諸国間**の熾烈な内戦、**アフリカ大陸各地**の内戦、ルワンダでは100日間にツチ族80万人が虐殺されました。**インドネシア**も内戦が続きました。**ベトナム戦争**、**イラン・イラク戦争**、**湾岸戦争**、そしてインドとパキスタンの**カシミール紛争**は、遂に両国が核兵器製造を始める結果にまで発展しました。

もう戦争は止めにしなければならぬ。新しく始まる**21世紀**は、世界平和を生み出す100年にしなければと誰しもが願って、迎えたはずです。ところがイスラム教徒による**9.11テロ事件**が勃発し、平和な世紀の夢は吹き飛んでしまいました。テロ報復の**アフガニスタン攻撃**、**イラク戦争**、**シリア**、**リビア**、**ソマリア内戦**、そして至るところでのイスラム過激派による**自爆テロ**と、戦火は治まりません。このまま殺し合いは続き、地球には平和は来ないのでしょうか。

恐ろしいことです。悲しいことです。神はどのようにお考えなのでしょう。

【1】救いの御業の終局

聖書は、**初めに神は**、天地万物を**甚だ良いもの**としてお創りになったと、書き始めています。そして私たち**人間**を、神ご自身に似る者として創り、樂園の管理を一任されました。しかしアダムとエバ夫婦は、**善悪の判断**だけは神に聞き従うようにという命令に反して、自分で善悪を判断して行動するようになり、その結果、神が創造された樂園は大きく**変質**して、今日このような罪に満ちたものになってしまいました。

そこで神は、**大洪水**をもって、地に満ちた**不法の一切**を拭い去る決意をされます。ところが**神の警告**を真剣に受けとめたノアだけが、箱舟を建造して大洪水に備え、生き延びることが出来ました。しかしノアの家族以外は、備えを怠って、皆溺れ死んでしまいました。その**悲惨な結果**を見て、神はもう二度とこのような大洪水をもって悪を拭い去る裁きは行わないとお決めになります。それは「**人が心に思うことは、幼いときから悪い**」という現実を、痛切に受けとめられたからです。(創世記 8 : 21)

そしてそれ以来神は、人間を**罪から救うみ業**を進めることになったのです。その**救いのみ業の決定版**が**イエス・キリストによる世界の救い**です。この救いは、イエス・キリストの**十字架の死と復活**によって、この地上に打ち立てられました。この十字架の**福音**が、弟子たちによって**全世界に宣べ伝えられる**と、キリストが再び**この世に来て下さり**、一切の悪を裁き、取り除いて、**新しい天と地**を確立して下さるのです。罪を悔い改めて、十字架の救いを信じて、どんな人とも**愛し合って共に生きる信仰**を、神は私たちに求めて居られます。

私たち皆が、**十字架の救いを信じる者となれば**、世界はどのように変わるのでしょうか？ ヨハネの黙示録の終わりに示された、**新しい天と新しい地**の核心を学ぶことにいたします。

【2】神が身近に住んでくださる世界

先ず 21 章 1～4 節をご覧ください。「わたしはまた、**新しい天と新しい地**を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。更にわたしは、**聖なる都、新しいエルサレム**が、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。「見よ、神の幕屋が人の間にあつて、**神が人と**

共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってくださる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。」

新しい世界とは、神が私たちの身近に共に住んで下さる世界、私たちの目から涙を全く拭い去って下さる世界です。何故私たちは涙を流して泣くのでしょうか。それは私たちの生活には、死、悲しみ、嘆き、労苦があるからです。その涙の種になる死、悲しみ、嘆き、労苦を、私たちと共に生きて下さる神が、私たちの生活から一切取り除いて下さるからです。何と嬉しいことでしょうか。「神さま、どうぞ一日も早く来てください」と叫ばずにはいられませんね。

私たちの文化には、「触らぬ神に祟りなし」という諺があります。「敬うけれども、祟りが怖いから、距離をおいて、近づかないようにする」という思いです。親密になり過ぎてつい失礼を犯したら、恐ろしい罰が下るという恐れから生まれた諺でしょうか。ご自分の方から私たちの身近に来て下さり、共に生き、涙の種を取り除いて下さる神さま——なんと有難いお方でしょうか。そのような愛の神と、身近に生きる世界がもたらされる信仰です。

【3】新しいエルサレム・神の都

もう一つが、神がもたらして下さる都、すなわち新しいエルサレムの様子です。21章9節以下をお読みください。最高の宝石や純金で造られた城門・城壁・大通りが記されています。神とみ子キリストが民と共に住んで下さるので、神殿はありません。また、神とキリストの栄光がいつも輝き渡っているので、太陽も月も必要ありません。夜と闇の無い世界です。

その都の光の中を、世界中から呼び集められた諸国の民と王たちが、仲良く歩いているのです。「諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。」「人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。」

地上の王たちが自分たちの栄光を携えて来るのは分かります。しかし王たちの前に「諸国の民は、都の光の中を歩き」と記され、更に王たちの後にも、「人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。」と記されています。王たちは「自分たちの栄光を携えて」都に来ていますが、諸国の民は「栄光と誉れとを携えて」都に来ています。王たちよりも民衆の方が誉め讃えられている——ここに王たちよりも諸国の民に注がれている神の眼差しが記されているのではな

いでしょうか。神にとって大切なのは、王よりも**民**なのですね。

世界中の人たちがそれぞれ自分たちの国の栄光と誉れを携えて来ると言われています。ではそれぞれの国の**栄光と誉れ**とは何でしょうか。私は色々考えてみましたが、**文化**ではないでしょうか。その民族や国民の生活に**特色**を与えている学問・芸術・技術・道徳・宗教・政治などを総合的に**文化**と言います。

日本人が大事にしている文化財を思い浮かべてみました。古くから保存されて来た神社・仏閣・城その他の建造物や仏像、その他の工芸品・芸術作品、そのようなものを生み出した職人技術や技芸、伝統・習俗・行事等にも及びます。日本は歴史の古い国ですから、世界的に誇れる文化が豊かにあります。

私たちは**キリストの福音**を日本の全ての人に聞いて信じて頂きたいと心から願っています。だからといって日本の各地にある由緒ある神社仏閣、それに付随する伝統的な美しい芸術を全部取り除いて、日本の国をキリスト教の建物とその文化一色にしななければならないと考えているのでしょうか。神の都には、**キリスト教以外は持ち込み禁止**だと、聖書は主張しているのでしょうか。

私のシンガポール時代の経験です。由緒のあるお寺を見に行こうと、バス停で降り、居合わせたシンガポール人に道を尋ねました。彼は私を見つめて「日本人か？」と尋ねます。「そうだ」と言うと「自分は先日日本に行って来た。古いお寺を訪ねたが、本当に素晴らしかった。それに比べたらシンガポールの寺は、子どもの玩具のようだ。ガッカリするから、行くのを止めた方がよい」と真剣に語りかけてくれました。本当にそうでした。玩具のようにカラフルな建物でした。仏教国タイでも、金色の大仏はやたらに大きいだけで、周囲の自然と調和していませんでした。

そこで聖書が「**人々は、諸国の民の栄光と誉れとを携えて都に来る。**」と記す時、日本人にとっては、古い歴史の中で先祖代々にわたって育て受け継いできた豊かな文化を、**民族の栄光と誉れ**として携えて神の都に来るように招かれる、と考えてもよいのではないかと思うのです。勿論今日の日本が世界から認められている諸分野の栄光と誉れも携えて行かなければなりません。

シンガポールは歴史の浅い国ですが、中国系・マレー系・インド系その他いろいろの民族が、**それぞれの**言葉や宗教を含めて**文化・伝統**を尊重し合いながら、しかも一つに団結して豊かに栄えて行こうと努力しています。**お互いの**

信仰を傷つけ合わないよう細心の注意を払い、平和で豊かな**多民族複合国家**を形成しています。これこそがシンガポール国民の栄光と誉れだと思います。世界はシンガポールのこの栄光と誉れを謙虚に真剣に学ばなければなりません。

【結】 神の都に入れる基本条件

しかしここで、私たちは、自分が果たしてこのような**神の都の民になれるかどうか**を考えなければなりません。何故なら 21 章の終わりに、「しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者は**だれ一人、決して都に入れない**。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れる」と記されているからです。

シンガポールの日本語教会で小学生時代にバプテスマを受けた真理ちゃんは、国際校小学部で学びました。英語の習得に大変努力しました。ところが日本に帰国して中学に入ると、**英語の時間が地獄**になりました。発音と正しい理解力と正しい本場仕込みの英語です。皆から妬まれ、いじめられ、疎外されてしまったからです。なんと情けない話でしょうか。**他の人の努力と誉れを喜び合う愛**がなければ、神の都は成り立たないのですね。

ルアンダで虐殺し合ったフツ族とツチ族の和解の働きを佐々木さんと共にしている韓国人リーさんが書いています。「アフリカの貧困の根は**人間同士の争い**、その争いは**人間の罪深い性質**から生まれている」。人間の罪深さが、アフリカの貧しくしている根本原因なのですね。そうです。争いを生み出す**罪深さの克服**——これは、神の都に入る**基本条件**でもあるのです。

ですから聖書は神の都の素晴らしい光景を記した後に、「しかし、汚れた者、忌まわしいことと偽りを行う者は**だれ一人、決して都に入れない**。小羊の命の書に名が書いてある者だけが入れる。」(21:27) と記しているのです。

ここで、**聖なる都、新しいエルサレム**が、天から下って来た時の**大きな声**をもう一度、聞き直さなければなりません。「見よ、**神が人と共に住み、人は神の民となる**。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の**涙**をことごとくぬぐい取ってくださる。」

自らが**人と共に住み**、人の目の涙をぬぐいとってくださる**神**——これこそ**イエス・キリスト**です。キリストは、人を妬み、争い、殺し合う罪から**私たちを救うために**、私たちに代わって十字架の裁きを受けて死んで下さいました。そして**愛し合って生きる救い**を与えて下さいました。

私は、その**イエス・キリスト**が、神の都の門に**待っていて下さる**と信じます。そして、私が未だ汚れていたならば、ご自分の血をもってその汚れを洗い清めて、都の中に迎えられる者にして下さるに違いありません。そして世界の様々な国の民が携えてきた栄光と誉れを、喜び合い、感謝し合って、神を褒めたたえつつ、生きていく者にして下さるに違いないと信じています。

祈ります：神さま、平和を願いつつ、銃が火を噴く世界で毎日を送らなければならぬ私たちを、どうぞ助けて下さい。私たちの目から涙を拭い取って下さい。私たちの心に互いを喜び合う愛を与えて下さい。世界中の人々が、それぞれの栄光と誉れを携えて集まって来る神の都を、早くもたらして下さい。私たちの罪深さを清めて下さい。救い主イエス・キリストによってお祈りします。

アーメン